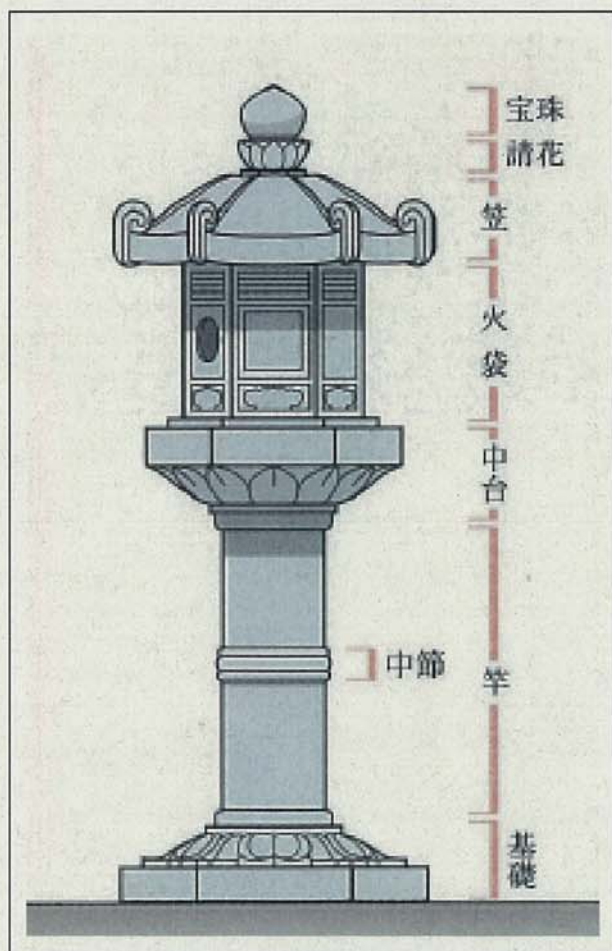


文化財パネル展 ののいち歴史探訪

「江戸時代の石造物」

町内には墓石や灯籠^{とうろう}など、江戸時代の石造物が各地に多く残っています。その中で灯籠など神社に置かれている石造物は、当時の村の人々が神に対して想いをこめて寄進したものです。

今回のパネル展は、町内に残る江戸時代の石造物、特に灯籠や手水鉢^{ちょうずばち}など神社に奉納されたものを中心に紹介し、そこから江戸時代における野々市の人々の生活像に触れていきたいと思います。



灯籠 各部位の名称

慶長	1596～1615	寛延	1748～1751
元和	1615～1624	宝暦	1751～1764
寛永	1624～1644	明和	1764～1772
正保	1644～1648	安永	1772～1781
慶安	1648～1652	天明	1781～1789
承応	1652～1655	寛政	1789～1801
明暦	1655～1658	享和	1801～1804
万治	1658～1661	文化	1804～1818
寛文	1661～1673	文政	1818～1830
延宝	1673～1681	天保	1830～1844
天和	1681～1684	弘化	1844～1848
貞享	1684～1688	嘉永	1848～1854
元禄	1688～1704	安政	1854～1860
宝永	1704～1711	万延	1860～1861
正徳	1711～1716	文久	1861～1864
享保	1716～1736	元治	1864～1865
元文	1736～1741	慶応	1865～1868
寛保	1741～1744	明治	1868～1912
延享	1744～1748		

江戸時代の年号



荒川神社



光松八幡神社



白山神社



現在地



布市神社



中奥八幡神社



役場



豊田日吉神社



林郷八幡神社

二日市町 荒川神社

名称：灯籠（とうろう）

年号：安政2年（1855）

石材：凝灰岩（ぎょうかいがん）

この灯籠は色が薄い緑色がかかった美しい形をしています。残り
もよく、火袋^{ひぶくろ}には花をあしらった装飾^{そうしよくせい}性のある彫刻^{ちようこく}が彫られて
います。



徳用町 光松八幡神社

名称：鳥居（とりい）

年号：文久3年（1863）

石材：安山岩（あんざんがん）

光松八幡神社は、明治4年（1871）に旧藩主の前田^{なりやす}齊^{かなや}泰が金谷^{ごてん}御殿（現尾山神社）内の八幡宮にある御神体や本殿などを移したものです。現在は欠損していますが、境内に残る鳥居も金谷御殿から運ばれてきたものです。



本町 白山神社

名称：手水鉢（ちょうずばち）

年号：文久2年（1862）

石材：安山岩（あんざんがん）

境内の裏手にひっそりと置かれています。石材は、金沢市の戸室山で採掘できる通称「戸室石」で、加賀藩前田家の居城、金沢城の石垣などにも使われました。



本町 布市神社

名称：灯籠（とうろう）

年号：嘉永2年（1849）

石材：花崗岩（かこうがん）

裏に刻まれた文字から、大阪長堀の江戸屋七兵衛という石工さんが作製したことがわかりました。花崗岩は関西地域で採掘できることから、この石は大阪から船などを使って運ばれてきたようです。



本町 布市神社

名称：灯籠（とうろう）

年号：天保2年（1831）

石材：安山岩（あんざんがん）

金沢市の戸室山で採掘された通称「戸室石」を使用しています。戸室石は民間の採掘を禁止し、加賀藩が直接管理していました。そのため、戸室石は武家が中心となって使われていましたが、幕末頃には一般庶民にも普及していきました。



藤平田 中奥八幡神社

名称：手水鉢（ちょうずばち）

年号：天保5年（1834）

石材：凝灰岩（ぎょうかいがん）

水を確保するために彫りくぼめた頂部^{やしゅ}以外はほとんど手を入っていない形状をしています。自然石のもつ野趣を重視し、わび・さびといった茶道の精神を生かしているといわれています。



栗田 豊田日吉神社

名称：灯籠（とうろう）

年号：元禄8年（1695）

石材：安山岩（あんざんがん）

四角い形をした灯籠で、竿^{さお}の四面には銘文^{めいぶん}が刻まれています。銘文から、加賀藩士の湯原應信が造立し寄進したものです。

この灯籠は、県内で確認されている紀年銘をもつものとしては二番目に古いものです。



上林 林郷八幡神社

名称：灯籠（とうろう）

年号：享和2年（1802）

石材：凝灰岩（ぎょうかいがん）

^{ひぶくろ}火袋や中台には、^{きかがくもんよう}花や動物、幾何学文様を施した^{そうしょくせい}装飾性豊かな^{ちょうこく}彫刻をみることができます。



獅子のような動物

おわりに

江戸時代に入ると、石仏や石塔などの信仰対象物のほか、建物や橋などの部材にも石を採用していき、その活用の幅は大きく広がります。

神社の境内にある鳥居や灯籠なども石を素材としたものが増えていきます。

江戸時代の後半には、野々市に限らず、全国的に地元の庶民が村に鎮座^{ちんざ}している神社に灯籠などの石造物を奉納するようになります。

このように石造物の奉納が増加することは、庶民の信仰内容に大きな変化があったことを示しています。また、石造物の奉納品は村の人々が集団で造立したものが多く、村内部の生活共同体をより強くすることを目的としていたようです。

野々市町内には江戸時代に造られた石造物が各地に点在しています。（今回は紹介していませんが、各集落のはずれにある墓地の中に置かれている墓塔にも江戸時代に造立されたものが多く見られます。）お散歩がてらに神社を巡って、江戸時代の造形品を観察してみてもいいかもしれません。